

相撲社会に生きる

上 沢 婦 記 子

結婚して18年、峰崎部屋を興して12年になる。世間的に私は「おかみさん」と呼ばれ、“夫である師匠を支え、力士の育成を行う”ことを生業としているのであるが、これは、自分が希望し、努力してこうなったというよりは、結婚と、思いがけない夫の独立とによって自動的になってしまったものに外ならない。

確かに私は、女子大時代、相撲研究会というサークルに所属し、日夜、大相撲を愛する学生であったことは事実だが、それが、実際の結婚となると、別もので、きっかけになったとは思いますが、偶然が重なったとしか言いようがない。

現在力士7名、行司1名、呼び出し1名の小さな相撲部屋を陰から支えている。

あくまでも陰からだ。というのも相撲社会は想像以上に男社会だ。相撲部屋の夫人としての公の場の出席もほとんど無く、相撲協会の新年会や、一門内での食事会などもほとんど夫人抜きで行われる。まして、本場所中、国技館へ出かけ、相撲を観戦することなど、以ての外だ。

よって、結婚後、国技館の桟敷に座ったのは、十数年前、引退した夫の断髪式を長男と一緒に眺めたのが最初で最後だった。

一見すると華やかな世界のようにも思われがちだが、いつも汚い格好でかけずり回っている自分にとって、たまに、テレビのワイドショーなどで見かける和服姿の美しい「おかみさん」と呼ばれる方々は、全く別世界の人々で、ましてや、玄関で優勝力士を迎えたり、金屏風の前で協会の使者を迎えたりする姿というのは雲の上の出来事と思われる。

初対面の方が、必ず口にする言葉は、「大変ですネ。食事から何から、お弟子さん達の面倒をすべて見ていらっしゃるんですねー」。

私はいつも、口ごもってしまう。この仕事は、どこからどこまで私がしなければならないとか、何と比べて大変と言ったら良いのかがわからないからだ。食事の仕度は、当番制で、私が口を出すのは、その日の献立と買い出しであり、彼らは、掃除も、洗たくも、自分達の回りのことは自分達でやる。病気や怪我の時だって（程度にもよるが）自分達の判断で医者に行き、病人の食事の世話や、身の回りの世話なども、力士達同士で、力を合わせてやらせるようにしている。それは、彼らが、プロの相撲人だからだ。自分の体の管理というものが、彼らにとって最も重要だという意識を植え付けたいし、お互いに、看病し合ったり、面倒を見合ったりすることによって力士間の信頼というものも育てたいと思っている。事あるごとに、私が女々しくシャシャリ出ていくよりは、私と夫が陰で見守り、おすもうさん達が中心に動いている部屋にしたいと思っている。

おかみさんとしての最大の仕事、それは、いかに強い力士を育てるかということに外ならないと結論づけている。朝4時に起きて、部屋のすべてをピッカピカに磨き上げ、ちゃんこ場をすべて仕切る。力士のひとりひとりの面倒をすべて見て、100%愛情を注ぎ込む。確かに立派なおかみさんとしての仕事はこういうことなのだろうが、強い力士を出せなかったらすべて無駄。勝たせることだけが“真”なのだ。だから辛い。

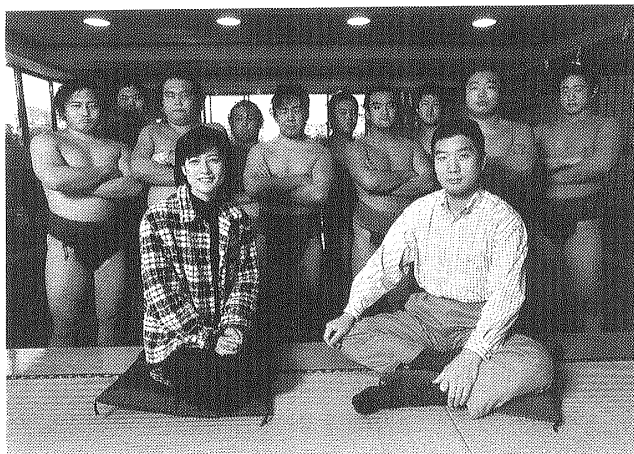
昔、結婚したばかりの頃、私はこの上なく高慢で、常に自分の力というものを信じていた。私は周囲にことあるごとに言ったものだ。「彼を私がきつと強くしてみせますー」と。

私は商売家の長女として生まれ、日々忙しく働き回る母の姿を見て育った。母はいつも私に言った。「あなたは長女なの。しっかりしなさい」。私はそれに答えるように親には心配をかけない。すべて私にまかせてーと育てて来たように思う。

そんな性格からか、新婚当時の生活を思い出すと、今でも身震いする。夫の取り組みはすべて正座して見る。（夫の相撲は怖くて見られません。ーなどと言う他の夫人のコメントは、私には理解できない。でも、そういう方に限って大関、横綱夫人が多いのはなぜ？）

Fukiko KAMISAWA

著者紹介〔略歴〕1980年3月日本女子大学家政学部被服学科卒。1982年幕内力士三杉磯と結婚。1986年三杉磯引退。年寄峰崎襲名。1988年放駒部屋より独立し、練馬区に峰崎部屋を興す。現在力士7名（幕下（浪ノ音、坂口）、三段目（秋山、柳原）、序二段（峰桜、扇竜、内飴））、行司1名、呼び出し1名を抱えている。〔連絡先〕〒179-0073 東京都練馬区田柄 2-20-3



自分の納得のいかない負け方の時は、帰って来た夫に問いたです。ゲンを担ぎ、場所中の食事は白星を意識して、白身の魚やとうふを多くしたり、もちろん栄養も徹底的に管理。負けが込むと、気分転換に外へ誘い出したり、気分が高揚するような映画ビデオを見せたり、反対に気持ちが安らぐ音楽を聞かせたり、そう、常に私も一緒に戦っていた。すべてが完璧と自負していた。

しかし一勝てない。一時、しのぎを削っていたライバル達が、次々に三役に上がっていく。私の自信もプライドもズタズタ。“内助の功”という言葉が大嫌いになった。

そのように悶悶として過ごした現役時代も、4年後、ついに終わりの時を迎えた。正直言って、まだ上を目指せるという思いも残っていたが、やはり、引き際は本人が決めるもの。最後は、何だか自分でもビックリする位あっさりとは認めることが出来た。そして、その2年後に夫は、放駒部屋から独立して峰崎部屋を興すことになるのだが、それは、全く思ってもみなかった展開で、私はただただ流れの中で、夫の後をついて行っただけだった。

弟子3人からスタートしたのだが、私は、チャンコの買い出しから仕度、後片づけ、着る物の世話、各方面への対応など、夫は、自ら廻しを締めて土俵に下り、四股やテップウなどの基本動作から本格的な取り組みの指導、その後の稽古場の掃除、そして、力士としての生活全般を一つ一つ教え、そう、すべて夫婦ふたりでやって来たのだった。

私にとっては、自分が教えるという立場にありながらすべてが初めてのことで、ちゃんこの味つけにしても何にしても、これでいいのかな？と悩みながらやって来た。

しかし、私の一番の仕事は、数カ月前まで、親の元で自由気ままに育ち、そして今、未知の相撲社会に必死で馴染もうとする少年達と、今より百倍元気で、理想に燃えていた熱血親方との橋渡しだった。とにかく、その時の私の願いは、皆が強くなり、その中から関取と呼ばれる者が出て欲しいとかではなく、一日も早く、この子達が相撲社会に慣れ、おすもうさんらしくなっていて、この部屋も相撲部屋らしくなってくれば良いということだけだった。

それから12年、創立当時から辞めないで頑張っている子もいれば、1週間で失踪してしまった子、再三の怪我で泣く泣く辞めて行った子、警察のお世話になって辞めさせざるを得なかった子、10年の辛抱の末、他の人生の目的を見つけて旅立った子、そんな風に沢山の少年(青年)達の出入りの末、只今、力士7名で峰崎部屋は成り立っている。

今では、私も夫もいちいち何も言わなくとも、一日の流れの中で稽古が終わり、ちゃんこ番が食事の仕度から後片づけを行い、午後は掃除と自主トレ…etcという具合により相撲部屋らしく動いている。

そして、夫が現役時代、私が狂おしい程持ち続けた勝敗に対するこだわりは、ウチの力士達に対しては不思議に持っていない。ただ、勝たせることが夫と私の第一目標であることには変わらない。ふたりでこの12年、強くさせたいと切望して、彼らに接して来たが、今だに関取の地位についた者はいない。今では、ひとりひとりを信じてその訪れを静かに待つ以外ないのだという心境でいる。結局は本人次第なのだから。

人を育てる一我々の世界においては、結果が白黒によって即、判断される訳だから非常にむずかしい。いや、反対に我々が育ててもらっているという意識さえある。

また、人間関係においても、裏切られたり、傷つけられたり、落胆させられたり、反対に傷つけてしまったり。いやいや、楽しいこと、嬉しいこともそれ以上にあったはずだ。初土俵からずっと白星の無かった子の初めての一勝。怪我からのやっとのカムバック。苦節12年目の三段目優勝。毎年の母の日のカーネーション。

普通の主婦の何十倍かの濃さの中で過ごして来た。そして、これからも私が“おかみさん”であり続ける以上それは続いて行く。どんな時でも、流れに身をまかせ、穏やかな気持ちで日々過ごせて行けたらと願っている。